

EBMの陰り

The shadow of EBM

神奈川県立保健福祉大学 学長 中村 丁次

Teiji Nakamura, President of Kanagawa University of Human Services

「エビカイカ知らないが医者経験に基づいた医療が最も優れている」。ある著名な臨床医が、EBMに関する研修会で叫んだ言葉である。EBMは、科学的根拠に基づく医療とされ、医師の個人的な経験や慣習などに依存した治療法を排除し、科学的に検証された最新の研究成果に基づいて医療を実践する概念をいう。1990年代にカナダで提唱された。その後、この概念は、医療のみならず保健、福祉にも拡大し、具体的方法が開発され、エビデンス構築の重要性が強調されるようになった。レベルが高いエビデンスは、対象者を無作為に介入群とコントロール群に分類し、有効性や安全性を統計学的に検証する方法である。有意差が認められれば、意味のある介入や治療として認められ、標準的方法としてガイドラインに記載される。実践の場では、このガイドラインに沿ってやれば、科学的根拠のある保健、医療、福祉が実施されることになる。

最近、このEBMに陰りが見られるようになった。その理由は、個別化医療：personalized medicineや精密医療：precision medicineからの指摘である。EBMは、平均的对象者に対して介入をすれば、しない群に比べて改善する確率が高くなることを証明しているものであり、実施の目安や参考にはなるが、慢性疾患患者や高齢者のように複雑、多様化した対象者には十分答えられていないことへの疑問である。現場では、英文で発表されたRCTを重視することもあり、正解は目の前の対象者ではなく論文の中にあるという誤解も招いた。このことは、ゲノム解析前は、全ての病気の原因はDNAにあると考えたことに似ている。

個別化医療とは、対象者個々の特性に対応した医療を言い、精密医療とは、個人の遺伝子情報などを含む詳細な情報を基に、精密な対応を行う医療を言う。2015年1月、オバマ大統領は大統領演説で、「今まで、ほとんどの医療は「平均的な患者」のために設計された "one-size-fits-all approach" であり、その結果、一部の患者で治療は成功するが、他の患者では成功しない。精密医学は、人の遺伝子、環境、ライフスタイルの個体差を考慮した革新的なアプローチである」と述べた。遺伝子構造の個体差から蛋白質構造の違いを見だし、それに基づいて健康状態や病態を理解し、環境や生活スタイルの特性を考慮して医療を実施することになる。注目する点は、従来言われてきたような遺伝子だけで個別化するのではなく、環境やライフスタイルの個人差に言及していることであり、これらの情報をどのように合理的に収集するかが重要な課題になる。そして、膨大な情報をWatsonのような人工知能に解析させ、最終的な評価、判定を優秀な専門職が実施する時代が、もう近くまで来ている。専門職が、ガイドライン通りにやるマニュアル人間にならないことを願っている。

